

作者のことば

羽柴秀吉は、主殺しをした明智光秀を大義にもとづき成敗したことにより天下人になった。ただし、それで一気に権力を握ったわけではない。ライバルと戦い、さまざまな画策を弄して関白まで上りつめた。そこに至るまでには秀吉ならではの強引さが見られるが、それで押しとおすことができる環境を整える努力を怠らなかつたからでもある。秀吉と家康の関係も、何度も破綻の危機がありながら、結果として家康がくだるまでにはさまざまな葛藤があり、心の揺れがあった。そうした心境の微妙な変化は資料をもとに推察するしかないが、それに触れなければ本当のところには迫れないのではないか。

全国の統一を成し遂げた秀吉の次の目標は、明国の制覇と後継者の選定である。

秀吉には実子がいなかったから後継者を誰にするかは大きな問題である。側室の茶々が二度にわたり男子を産んでいることが、この問題を複雑にしているのだが、秀吉自身も肉体的欠陥を自覚していた。秀吉は実子の誕生を諦め、何人も養子をとって後継者にすることを考えた。だが、秀吉が五十歳を過ぎてから、側室の茶々が男子を産んだことで事情が変わった。秀吉が実子であると主張したからだ。当時は、誰の子であるか確かめようがなかった。『戦国武将のカルテ』を著した医師で歴史小説家の篠田達明氏は、鶴松も秀頼も秀吉の実子ではないと明確に否定している。何十人もの側室がいたのに茶々以外は懐妊していないからだ。

医学的に見れば秀吉の実子は存在しないのは確実だろうが、多くの歴史家や研究者は「鶴松も秀頼も秀吉の実子である」と信じているか、この問題を避けているようだ。筆者が寡聞にして知らないのかもしれないが、実子ではないと主張しているのはこれ以外に『河原ノ者・非人・秀吉』の著者の服部英雄氏しか見当たらない。氏はこの論のまとめで、新しい資料ではなく、既存の資料を検討して結論を出したと述べている。資料の解釈は一樣ではないから、推論が入り込んで正反対の結論が出ることもあるし、それまでの通説を否定する主張もある。ところが、秀吉の実子問題に関して学者のあいだでは論争さえ見られない。秀吉が実子と言いつ張ったことが大きいのだろう。彼の権力が大きいため、疑いをもつ人の多くは口をつぐまざるを得なかったし、建前を尊重する朝廷は鶴松や秀頼を実子として扱っている。こうした状況があつて、実子でないという状況証拠は集めづらくなっている。

服部氏は、鶴松の場合は、秀吉が茶々に言い含めて宗教的な儀式の最中に誰かの種を宿すようにし、妊娠すれば実子として育てる約束をしたのではと推測している。卓見である。秀吉は親戚の子供を養子にしたが、茶々の子であれば、彼らより後継者にふさわしいと秀吉も思い、結果的に実子であるかのように扱った。父親になりたいという秀吉の願望がある程度は叶えられるところがあるから、納得できる見解である。

鶴松は幼くして亡くなったが、秀頼は成人している。その秀頼を秀吉が溺愛したというのが、秀頼を後継者にするつもりになったのは、秀吉の生涯の目標である明国の制覇の挫折と無関係ではないだろう。秀吉は失敗を認めていないが、海外遠征の目標や犠牲の大きさに比較すると、朝鮮と戦った文禄の役で得たものはあまりにも小さい。しかも、当初の目標である明国制覇は不可能になった。生涯をかけた目標の挫折

による衝撃は決して小さくなくつたはずである。秀頼が誕生したのは、そのときと重なる。秀吉はこの失敗を忘れない（あるいはなかったことにしたい）という意識が働き、心理的に追い詰められた。権威の失墜を恐れるあまり、秀頼が後継者として世間から認知されることと、自身の権威を維持したい欲求が結びつき、結果として秀頼にこだわらざるを得なかったと思う。

明国の制覇に臨むまでの秀吉と、挫折した後の秀吉とは、とうてい同じ人物とは思えないほど、まつりごとに取り組む姿勢は変化している。ところが、秀吉に関する記述の多くは、文禄の役後も、天下を取ったときの勢いのままの秀吉であるかのような扱いをしているものが多い。家臣だけでなく徳川家康をはじめとする武将たちも秀吉を支えたから、その権威は脅かされなかった。だが、実際には裸の王様になっていたといえよう。

文禄の役から三年以上にわたり休戦状態が続き、秀吉がまつりごとに熱心に取り組まなくとも問題が起きなかった。そのあいだに秀次の切腹事件があり、老年期を迎えた秀吉は病に臥せりがちになり、自身の後継者問題以外に関心を示さなくなる。

慶長の役が始まってから、秀吉は率先して指揮を取るところか戦いに関心を示していない。文禄の役との違いは秀吉だけでなく、すべてを巻き込んだ違いであることは強調しなくてはなるまい。そして、秀吉の死後、家康は秀吉の残像ともいえる勢力との戦いに挑まなくてはならなかったのである。

第二部 秀吉の栄華と臣従する家康・目次

作者のことば 3

第七章 賤ヶ岳の戦いおよび小牧・長久手の戦い	9
第八章 秀吉の関白就任と家康の上洛	63
第九章 聚楽第への行幸と北条氏成敗	126
第十章 唐入りにともなう混乱と秀吉	179
第十一章 関白秀次事件と慶長の役、そして秀吉の死	240
第十二章 関ヶ原の戦いに至る二年間	307

第一部 信長の台頭と若き日の家康

プロローグ

第一章 三河守・徳川家康の誕生	
第二章 信長の上洛と家康の遠江攻略	
第三章 反信長連合との戦い	
第四章 朝廷と信長、そして家康の武田氏との戦い	
第五章 安土城の完成と反信長連合の解体	
第六章 武田氏の滅亡と本能寺の変	

第三部 家康の江戸開府と国づくり

第十三章 関ヶ原合戦の家康による後始末	
第十四章 家康の征夷大將軍への就任	
第十五章 江戸の開発と秀忠への將軍讓渡	
第十六章 駿府城に移った家康	
第十七章 禁教令と大坂の陣の前夜まで	
第十八章 大坂の陣と家康の死	

エピローグ

主要参考文献

『戦国時代の終焉と天下人への道程』は、全三巻から成る三部作です。

第七章 賤ヶ岳の戦いおよび小牧・長久手の戦い

1

本能寺の変の勃発で陥った混乱も、羽柴秀吉が直轄地にした京の治安維持の任務を負い、数か月のあいだにとりあえず落ち着きを取り戻した。秀吉は光秀と戦った天王山近くの山崎に新しく城を築き、京に滞在することが多くなっている。だからといって、朝廷が秀吉を信長の後継者として認めたわけではない。信長亡き後の後継者は誰になるのか、依然として波乱含みである。

信長配下の武将のなかでは羽柴秀吉と柴田勝家しばたかついえが抜きん出た存在になっている。筆頭家老の地位にいる勝家は、秀吉を新参者として見下す姿勢を崩しておらず、いっぽうの秀吉は自分のほうが武将としての能力や才覚で優れているという自負があり、二人の関係は良くないままである。織田氏のなかから後継者を出すのが筋であるものの、信長の次男の信雄のぶかつと三男の信孝のぶたかも相容れない関係にあり、勝家は信孝と結びつき、秀吉は信雄との関係を強め、対立の構図が明瞭になってきた。果たして、話し合いで決着がつくのか、戦いに至るのか。

先に動いたのは柴田勝家のほうである。清洲会議きよすの二か月後の一五八二年（天正十年）八月に、勝家は信長の妹、お市いちと再婚した。信長が生きていたときから、お市を自分の正室に迎えたいと勝家は、それとなく信長に申し出ていた。信長もそれを否定しなかったもので、勝家は信孝をとおして婚姻を進めたいと話し、信孝も乗り気になった。お市との婚姻は、勝家と織田家との関係を深める。浅井長政あざいながまさの敗死以来、織田家に戻っていたお市の存在感は大きかったし、この婚姻を仕切った信孝が勝家を後ろ盾にして主導権を握ろうとした。

この話を聞いた秀吉は「それはめでたい、ぜひ進めるように」と賛成したものの、勝家が信長の義理の弟になるのは内心は心穏やかというわけにはいかなかった。信雄も同様に信孝の態度が気に入らない。勝家と秀吉との関係はそれまでより緊張感を増した。

そんな秀吉にチャンスがめぐってきた。朝廷に貢献した信長に「太政大臣」の位を贈る意向を天皇が示したのがきっかけである。そのために武家に相談する必要がある、朝廷が秀吉に働きかけたのである。朝廷と接する際の作法が分からない秀吉は、自分から接近するわけにはいかないから、渡りに船だった。

朝廷の使いが秀吉を訪ねたのは、無位無官のまま故人になってしまった信長に正親町天皇おごみちが「贈官贈位」の儀式を挙行しようと考えたからである。生前に朝廷の高い官職に就くよう信長に要請したのに、それに答えないままだった。すべての人たちの頂点に立つのが天皇であるから、信長には臣下として朝廷の序列のなかに収まってもらわなくては天皇の気が休まらない。そこで、信長を追善して信長の霊を慰め、生前の行為に感謝して官位を贈ることにした。朝廷の官位を信長に与えれば、臣下として朝廷の秩序に取り込める。信長を天皇の臣下にしておかないと、朝廷とは関係ない天下人と思われてしまう。それは避け

たい。

だが、本能寺は炎上して遺骨も残されていないうえに、正式な葬儀もおこなわれておらず、信長の位牌いはさえつくられていない。「贈官贈位」の儀式は、信長の霊が宿る位牌が存在していなければ実施できない。相談された秀吉は、主君信長の葬儀が実施されないままで良いはずはないと、ひと肌脱ぐつもりになった。お市が北ノ庄にある勝家の城に入った直後である。

位牌をつくれれば済むという問題ではない。信長の供養をして霊が位牌に宿るためには葬儀をしなくてはならないが、信雄か信孝かどちらを施主にするかで揉めて、どちらかに決められない。葬儀にまで対立を持ち込んだのでは織田氏の権威が落ちてしまう。

秀吉が思いついたのは百日忌法要の実施である。信長を供養する儀式をすれば、そのためにつくった位牌に信長の霊が宿る。本葬ではなく法要だから、自分の養子になっている秀勝ひでかつを喪主にしても問題は起きないはずだ。自分の子供がいない秀吉は、生前の信長に頼み、信長の息子であり信雄や信孝の弟である秀勝を養子にもらい受けていた。だから、秀勝を喪主として法要を営んでもおかしくない。というのも、信雄は北畠氏きたはたけ、信孝は神戸氏かんべの養子になっていて公式的には織田家の人間ではない。だから織田家を継ぐのは信長の直系の孫である三法師さんほうしとするのに誰も反対しなかった。信雄の義父の北畠氏も、信孝の義父の神戸氏も、信長配下の武将として活躍したわけではない。だが、秀吉は信長の武将であり宿老なのだから、養子となっている秀勝を喪主とし、秀吉がその後見役をつとめて良い立場になる。朝廷の意向を汲んで信長の供養を実施するのだから、信雄や信孝も反対するわけにはいかないだろう。

この考えを文書にして、秀勝が法要の際の喪主となる許可を与えて欲しいと秀吉は朝廷に申し出た。な

著者略歴

尾崎桂治（おさき・けいじ）

東京生まれ。一九六〇年代から月刊誌の編集者として活動。その間、イギリス、フランス、イタリア、ケニアなどに取材で訪れる。その後、出版社を設立。二〇年以上にわたって経営する。主として書籍の企画、編集、取材、執筆などを手がける。かたわら日本の歴史研究、執筆を行う。著書に飛鳥時代の歴史を綴った三部作『飛鳥京物語』（三樹書房）がある。

戦国時代の終焉と天下人への道程

秀吉の栄華と臣従する家康

著 者 尾崎桂治

発行者 小林謙一

発行所 三樹書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一-三〇

電 話 〇三（三二九五）五三九八

FAX 〇三（三二九一）四四一八

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

©Keiji Ozaki/MIKI PRESS Printed in Japan

本書の全部または一部あるいは写真などを無断で複写・複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利侵害になります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版權管理部に許諾を求めて下さい。落丁・乱丁本は、お取り替え致します。